



岩田栄一



朝野好信



宮川朋子

ダイアログとしての小品展 起源イブ・第四夜

Part.1: 2000.5.22Mon.-6.3Sat.

Part.2: 2000.6.5Mon-6.17Sat.

あらゆる美術作品は鑑者と見る者、書く者と読む者によって成立する。すべては一個人の眼と手から発せられている。人は絶えず自分のいる「世界」を見ることと自律した「世界」を作ることの間で揺れている。この、作品展示とディスカッション、批評文の提出からなる「起源イブ」という展覧会は、滅絶する批評精神に対する危機感をコアとしたコミュニケーションの場である。アートとは何か、自分がつくっているものあるいはつくろうとしているものは何か、という二つの問いの交差を起点とする議論の場である。

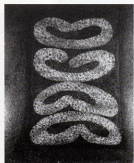
どのような表現であるにせよ、しばしば我々が、自分が考えていることについて考えるように、自己言及的な批評性は表現行為に内在している。それが極限化による袋小路に陥り、限りなく無に近づいた縮小感覚と、概念的拡張における領域の崩壊に因って生じる無限の拡大感覚を呼び起こしたとしても、その問いの抽象性と根源にある具体的な希求の間を行き来することでしか、表現行為は成立しない。

これまでの「起源イブ」で、参加者各々のモチベーションの差異は粗力浮き彫りとなった。直線的な文脈で「現代美術」を語れなくなったがすでに自明である現在、果たしてどのような同一性においてそれが可能なのか、ジャンルを横断し、人と人を繋ぐ態度であるということが、ディスカッション/ダイアログとアートの共通項だとするならば、あらゆる位相のものを「1」対「1」に還元しつつ、その差異と同一性を明らかにすることによって立ち現れてくる何かこそが、「わたし」と「あなた」を「わたしたち」に向かって解き放つ。「出会う」とは一体どのような境界点において可能なのだろうか。

ワ3プロジェクト 高峰晋一



水留周二



山口隆志



徳田智子



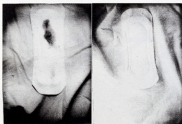
橋本正太郎



橋原章代



古田浩



佐竹真由実



渡辺喜裕

in Gallery Surge

あらゆる芸術活動と交流の源になるべく付けられ、始められた【ダイアログとしての小品展・起源イブ】は、今回で4回目となります。この企画は、美術大学生やアーティストが、【小品】を【グループ展示】し、それを背にして鑑賞者も交えて語り合い、【ディスカッション】することで、世代やジャンルを超えて、芸術に関わる人々の交流の場をつくり出すことを目的とし、作品や展示企画の斬新な展開を生み出していくものです。

【第四夜】では、学生が主体となり企画を立ち上げ、参加作家を募り、その世代は20-40代、活動地域は東京だけでなく、名古屋からも参加し、表現方法は平面・インスタレーション・パフォーマンス・映像・立体と多岐にわたります。

1. 現代世界の現況

現在の国家や企業を取り巻く様々な問題は、従来の既立した制度やシステムでは解決しきれない規模と広がりを持ち、スピードと危機性を孕んでいます。

しかし、専門的に確立されている、それぞれの地域・ジャンル・職業は、自閉的な富利競争にやっかになり、共通言語やコミュニケーションの場を失ってはいないでしょうか。乱立する小さな市場と狭い歴史の認識に支えられた、バーチャルな文化と商品の消費が、あらゆるオリジナルティが感じられない「イメージ」で飽きながら、相手を顧みないようとし、差異と特権ばかりを主張する「育中合わせの日常」を生み出しました。

私達の即時的、即物的な欲望が、自ら虚構の関係性破綻の恐怖を刷り込み、地域・ジャンル・職業を超え、異世代間の縁のつなげや同世代間の横への突きぬけを誘外し、身動きをとらないまま、漠然とした危機感・焦燥感におびえています。

2. 美術の現況

上記のような状況は、時代を先行・創造する水鏡たる現代美術にも、深刻な影響を与えています。

日本という美術市場も美術批評も発展していない中で、捏造された流行による経済的波及効果という結果のみが、氾濫するコンペ、コンテスト・公募展において求められています。

そして、規制的な美術史の中で自己正当化し、世界美術市場に対する傾向と対策で戦略的に乗り切ろうとする作家が増え、他ジャンルのイメージや技術を流用した、その専門家から見ると、単なるまがい物としか見られない作品が増えました。結果、他ジャンルの批評性・影響力・競争力を失い、知的美観性と社会性が減退してしまいました。

また、アーティストの自主的な発表と交流の場として発展した日本の貸し画廊制度は自閉的な温床と化し、美術大学においても、他者の作品を批評したり、科を超えて、批評的意識を持つ交流をすることがなくなりま

した。しかし、美術の場とは、社会と密接に結びついた批評・制作の場だとすれば、アーティスト自身が作家・批評家・展覧会企画者・観客の分業を疑い、ジャンルを超えて新しい世界への批評性を含んだコンセプトや、作品の制作技術を輸出し返す。批評的ダイナミズムが必要ではないでしょうか。

3. ダイアログとしての小品展【起源イブ】の発足

1. 2の現況を飲み込み、打開すべく、W³/ダブルユー・キューブ・プロジェクトメンバー水留周二・北山理子・天野豊久提案のもと、1999年2月、【起源イブ】は始まりました。

なぜ、【ダイアログ（対話）】か

今日、美術大学において、作品を前にして深く語り合うことは、ほとんどありません。同じ科でもそうですし、違う科よりどころがなかったらです。自分の見聞、そして、その企画に参加してきて対話や批評の場を人々の意見を聞いたり、自分の作品を見つめたりして、他の作品を批評することは、思いもよらなかった作品の見し方を生み出すことにつながる、創作や、与えられているだけの場を見直すきっかけになりました。

なぜ、【小品展】か

小品は、小さいだけでなく、作者の制作コンセプトや感性を、もっとも端的にあらわしていると言えます。加えて、場を変えての展示や、連続的な企画として交流をはかるため、グループ小品展という形となりました。

4. 起源イブの歩み

第一夜：1999年2/1-2/13 ギャラリー・サージ

青木敦 天野豊久 伊藤洋介 高嶋晋一 橋本正太郎
水留周二 柳沢志志 吉田浩 渡辺晋博

ディスカッションはそれぞれの表現への生きた言葉が交わられ、「美術史と言う縦軸の欠如」「私を表す作品、価値観を表す作品」「作品が与えてくれるものを見出すもの」「美術と、教育・社会との関係」「作家が、表現の場作りや、展覧会を立てることの必要性」「持来、作家としてやっていきたいこととしている/与え、のか」などのキーワードとして話され特に、【イメージ表現】や【共有感】への「世代間の認識の差異」がテーマとして、二度に向かうこととなりました。また、この展覧会を引き金として、1999年5/10-5/22に、多摩美術大学において14名の学生が、科を超えて「作家の見える展覧会/橋本正太郎」と題打ち、展覧会と公開討論会を開催しました。



ディスカッション風景
(起源イブ第一夜より)

第二夜：1999年6/7-6/12・6/14-6/19

ギャラリー・サージ

パート1 阿部晴美 天野豊久 伊東直樹 植野公友 高嶋晋一

パート2 橋原章代 出口直貴 橋本正太郎 水留周二 吉田浩

二夜は「イメージ表現」「共有感」などのキーワードにおいて事前に自分の作品のコンセプトや表現に向かうモチベーションをテキスト化・表明し、ディスカッションに臨みました。

しかし、「イメージ表現」への認識についての討論は、それぞれ「イメージ」という言葉の捉え方が違ったため、自他の解釈を狭めてしまい、自分だけの夜はかなイメージから出る批評-自己攻撃的な自己弁明も遠慮がちな感想を言い合うだけや平行線になってしまったこと、会話を続ける意志と発言への思い違いが原因のことがあげられました。ディスカッションの後、それぞれの作品に対して、いくつかの批評文が提出されました。

第三夜：1999年9/6-9/18・9/20-10/2

ギャラリー・サージ

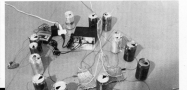
パート1 伊藤直樹 遠藤太郎 水留周二 渡辺晋博

パート2 阿部晴美 天野豊久 徳田智子 橋本正太郎 吉田浩

第三夜は二夜の反省から1日目は他作品について自分の制作へ向かうと同じことだわりから語り（特に、河原野村・真と感じた所）について批評が反論・主張で3日目にそこから出たキーワードでまた作品に戻しながら語るという方式となりました。この方法から、他者のより良い、否定的な意外な解釈や、自分の観点を明らかにし、「イメージ」というものの他者の差異を浮かびあがらせ、より高い音の批評性や作家活動へのフィードバックをめぐりました。

テーマとしては「美術におけるハード・ソフト」「美術と国家・戦争・メディア・超消費資本主義」「批評と感想の違い」「現代の鑑賞の共有」「表現の現場や考え」「美術における和風」「作品に自分を重ね合わせるか、イメージ表現と決別し、まだ見ぬものを作り出すか」「他人が感じる魅力は、作家の作品内の流れ」「自分のイメージに因って作品をセーブするの必要はない、自分のやれてこなかったこと、やりたかったことをやるのが作品を作ることだ」などなど、多岐に亘り議論がかわきました。

事後ミーティングにおいてそれぞれの作品についての批評文が提出され、これからの起源イブ、批評とはどうあるべきかが話し合われ、第四夜への提案がなされました。特に、「批評と感想の違い」について議論し、批評が感想止まりになってしまうのは、作者はこう作りたいかたど無責任に判断するためであると考えました。作者のためを思い、「おれもはかって」発言し、自分のその作品にどういふ価値を見出したか明らかにし、自分の観点を明らかにせず、自分への反論のないまま、発言してしまう、そうすると、ディスカッションは表面的に他者に賛成し同調されたものや、教育者でも、通じず、批判的になどのもとなつて、深まっていないだらうとされました。そして、枝葉の差異を探り合うのではなく、参加作家個々のアート観や探究の姿勢や方向性について語り合い、お互いの作品に共通点を見出し合うことから生まれる、世代/ジャンルを横断するような共通言語を創造していくことが必要であると考えました。また、起源イブ事務局が設置され、第四夜を2000年5/22-6/3・6/5-6/17まで、第五夜を10-11月に開催することが決まり、参加者を募ることとなりました。（橋本正太郎）



水留周二
【Discussion】1999
【起源イブ】第二夜出品作品より

Part.1

佐竹真由実 / Mayumi Satake

1978年 (S53).4.13生 22才
1999.12月 Club Plastic 展示 (看護婦)
2000. 2月 Club Plastic 展示 (産婦人科医)
2000. 3月 Club Shelter パフォーマンス “水虫居の官能旅行”
性的欲望2 ヨッチウタシタチハ支配サレル、ソレユエニ人様マデ
モガ 顔面 シタク。
ウタシタチハエロスノ 根本的象徴デアリソノ証拠トナツテ
存在スル。 グレを止メル事ノデキナイ 人格交代ニヨル
変貌。 欲望ニ対スル性的エネルギー放出
スペテ支配サレ無テトリアス
人権ハタダノ 生贖者ニシナイ 本能ノ ママニ エロスヲ欲ス

椿原章代 / Akiyo Tsubakihara

1987年より作品発表。身体的な「こと」についての思考と、文字や記号的なものとの作品の関係について展開する。
90年よりOST-ORGAN参加。96「平面または3.2.1」ART SPACE GARELLY.97「Installation on Installation」同上「服差しのゆくえー現代美術のポジション1997」名古屋美術館。99「Corner the art」名古屋芸術大学EBeE「garden-garden」名古屋屋20号倉庫「3号倉庫における視座作品シリーズ」大観展「名古屋科学館など。

水留周二 / Syuji Mizutome

1950年新潟県生まれ
ディスカッションとは、cuss (呪い) を解く一つの解体作業である。呪いは、行方不明のない精神の奥底から湧いてくる。かつてアートは、上座に位置して遠い話のなされたものにビジョンを放出する力を備えていた。しかし、溢れる呪いの渦の中でアートの独自は何も年々ない。各々が双方向性を原理とするディスカッションの場で、互いに足踏みの姿形を限りなく究明に向向へと変換する。交錯する音声の論理を引き寄せると、それは共通の交差点となる。ディスカッションの原理は、アートを高さから解放させる。

吉田浩 / Hiroshi Yoshida

1967.4 多摩美術大学入学
1999 グループ展「ダイアログ」としての小品展 起原イブ・第一夜 同「第二夜」「第三夜」ギャラリー・サージ (東京・神田)、グループ展「機型洗濯機」多摩美術大学内ギャラリー (東京・八王子)
主なコンセプト：批評点
大きな流れの中で何らかの要因による副産物として発生し、漏れし、消えてゆく。そして何らかの縁を結び、知覚させ感覚として残してゆくモノ。それゆえ再認識しなければ、何の意味も結ばない。ただ消えて行くばかりである。

劉 好倩 / LIU, YU-CHIEN

1976.11.5台湾 (台北) 生まれ。
現在、多摩美術大学1年
私は、生と死、感情、記憶、光と空間、曖昧、喪失、一瞬と永遠、をイメージし、立体と平面の作品を組み合わせてきました。
自分にとって、作品は説明するものじゃない。
それはあらゆる神話に含まれるものと同様の、日常世界の小さな現実を描くメッセージを発している。

岩田栄一 / Eiichi Iwata

1973年岐阜県生まれ
1999年「グループマナー/ドーナツ展」ワタリウム美術館 オンラインーズ (東京)、「アンロジ」canolan (名古屋) 旭展覧会多数、現在、アートスペース「dot」運営、管理に参加。
とある。疑問が二つあります。一つは、彼になって自分の家を、他人の家と間違えたりするのは、なぜか、二つ目は、『誰いかに殺した』が実際に利用可能な世の中は、何ですか。そして、間違えたり送って考えている中で、病人のように健康状態を無視してもいいような気がしたからです。また表現については、言葉や構造と、その目的が異なる。気がするから。

徳田智子 / Tomoko Tokuda

人を描きたいと想う私の気持はかな想いは、日々の生活の中で、簡単に流されてしまいがちです。
しかし、それ以上のヒントが日常の中で用意されていると思います。
私は、それを受け取り、私という道具を使って、人を表現したいと考えます。

橋本正太郎 / Syoutarou Hashimoto

1978年、東京都生まれ、多摩美術大学在学中。
1999年、グループ展「ダイアログ」としての小品展 起原イブ・第一夜 同「第二夜」「第三夜」ギャラリー・サージ (東京・神田)、グループ展「機型洗濯機」多摩美術大学内ギャラリー (東京・八王子)、「小西博仁×橋本正太郎」銀座複五画廊 (東京・銀座)
正しさを過ぎない後めたさに勝つ。
愛している。信じている。氣にしている。
話したい。広げたい。笑付きたい。同じになりたいた。
君と僕の死なさを。表す。遊ぶ。見る。撞る。見せる。
幸せに死にたい。

宮川朋子 / Tomoko Miyagawa

1977年生まれ
詩集「夜のパラデオ」「構内の電」「フィルムの中の真実」
詩と絵画の融合による新たな展開を視すべく展開中。
「空はさびし/マドに霜がつか/街灯/車/遠くの住所/光という光は直ぐは直ぐ/ノビ/植木鉢の間に雲水晶のように/気がつく/おまえを慕う光はは/私の冷たい顔をつける」
詩集「構内の電」

山口隆志 / Takashi Yamaguchi

1969年 鹿児島県生まれ 1995年 東京芸術大学絵画科油画専攻卒業
個展、グループ展多数。
私の作品は、主に自然や生命を題材としている。油絵の筆を使った平面作品であり、触感的空間を創造している。触感的空間とは、三点消失遠近法や、陰影による量の表現等といったいわゆる西洋空間遠近法を否定して、点や線またはマチエールによって空間の重なりによって、空間を加算認識し表現していく考え方である。私の作品に出てくる奇妙な形体は、例えばある形体をもつ石を、枯山水の中に設置すると、その石が生命を持ち、観や龍に化身するといった日本人独特の感覚や、間の取り方をヒントに、私の内面から出てくる、蓋感的で、抽象的な形体をこの触感的空間の中に設置する事によって、より独自の世界が表されるのである。

渡辺喜裕 / Yoshihiro Watanabe

1976.4.8生まれ W³プロジェクトメンバー 起原イブ第一夜、第三夜参加
現在多摩美術大学在学中
1999. 個展「plant」ギャラリー・サージ (東京・神田)
学生グループ展示・ディスカッション展「機型洗濯機」企画・出品
「Liebest Biss+Jos van der Pol 講演会」主催 (多摩美術大学内) 他
自分を奪り取る状況を、書いた顔で見ないこと。良いことも悪いことも。

ディスカッション / Discussion
19:00-21:00

- 22 23 24 25 26 27
- 29 30 31 1 2 3
- 5 6 7 8 9 10 11
- 12 13 14 15 16 17

・どなたでも参加できます。

企画・制作 W³ Project / ダブルユー・キューブ・プロジェクト

GALLERY SURGE
101-0032 東京都千代田区西葛西 2-7-13 渡辺ビル1F
TEL. 03-3861-2581 FAX. 03-3861-2582
2-7-13, iwamoto-cho, Chiyoda-ku, TOKYO 101-0032
URL: http://www.catnet.ne.jp/surge/
e-mail: surge@catnet.ne.jp
「起原イブ」事務局
〒182-0273 八王子市上杉4-1035 池袋街208
TEL / FAX. 0426-77-9206
lkemi-sou208, Kamiyugi1035, Hachioji-shi, TOKYO 182-0273
E-mail = way@mx4.tccn.ne.jp



河津橋駅裏手徒歩7分。地下鉄山手線・池袋線
約4・2。都営副都心線約5.5分徒歩9分。

・起原イブ第五夜 参加者募集のお知らせ：現在、次回起原イブ・第五夜の開催を、今年度中に予定しています。
詳しくは、起原イブ事務局まで御連絡下さい。